科学史から消された女性たち

ロンダ・シービンガー　著
小川眞里子・藤岡伸子
家田貴子　共訳
工作舎　2022 年 9 月

30 年間のギャップを経て改訂新版

1992 年 10 月に出版されたシービンガー著『科学史から消された女性たち』の改訂新版を、30 年の時を隔てて 2022 年 9 月に出版することが叶いました（図 1）。以前から気になる訳文はありましたが、全面的な改訂まで考えることはありませんでした。重い腰を上げるきっかけになったのが、以下の『化学史研究』（化学史学会会誌）編集部からの依頼でした。

改訂訳の出版に向けて

2020 年に「科学史の名著」として何か取り上げるよう、先の編集部から依頼を受けたとき、すぐに頭に浮かんだのはこの本でした。科学とジェンダーの問題を取り上げ、科学史研究史上に新たな分野を切り開くことになった名著に違いないからです。加えて、若い私の友人 2 人と共に翻訳を行った楽しい思い出に満ちていたからです。共訳者の家田貴子さんは名古屋大学大学院農学系研究科修士課程を修了して東京に移られ、科哲の大学院修士課程を経て博士課程に在籍中でした。駒場の比較文学比較文化出身の藤岡伸子さんはご結婚されたばかりでした。そんな状況なので、3 人顔を合わせて訳文の相談をしていても、最後は自分たちの話になり、笑い転げていたことを思い出します。なんだかよく分からないけど楽しい時間でした。

図 1　科学史から消された女性たち　改訂新版

しかし「科学史の名著」の小文を執筆するために、30 年の時を超えて再度読み始めますと、そんなたわいもないおしゃべりや笑い声など消し飛んで、これはまずいと冷や汗が流れました。原著を名著と言いながら、名著の誉れを貶めている訳書というのでは、あまりに原著者に申し訳ないと考え始めました。研究環境もインターネットの普及で大きく変わって、翻訳に必要な文献の参照も昔には想像もできなかった程に容易になりました。関連しそうな著作などをネットで見たり、具体的によくわからなかったイコノロジーについても多くの著作や翻訳が出ていることに気が付いたりで、この 30 年間の変化に驚くことになりました。自分の年齢を考えても決心するなら今しかないように思われ、工作舎の十川治江さんにご相談し、在庫もほぼなくなっているということで改訂訳を出して頂くことをお願いしました。

さて改訂版の出版について一番の問題は、版下がなく全てを新たに入力し直さなくてはならないことでした。訂正箇所を適宜入力してもらうことを考えていた私は、ここでも 30 年の歳月のギャップを思い知らされることになりました。版下があれば、訂正箇所で済むことが、一字一句本文から注、参考文献に至るまですべて修正したものを入力してもらわねばならなかったからです。当然なことですが、その過程で新たな入力ミスも生じます。校正では、十川さんに大いに助けていただきました。初校、再校、念校とそのあとも延々とやっていたように思います。そしてこの 30 年のギャップでインターネットの威力をさらに思い知ったのは、工作舎のスタッフが原著挿絵の肖像画が別人であることを発見して下さった時です。

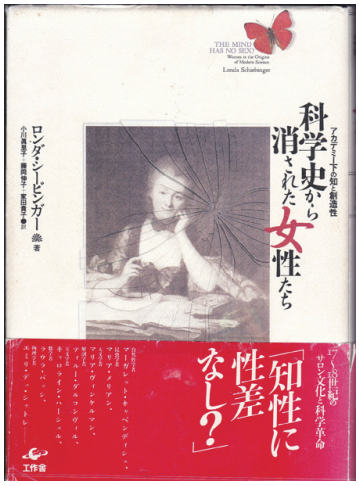

図 2
科学史から消された女性たち（旧版）

図 3　肖像に関する説明が付いているエッチング。メリアン没後 8 年ほどの 1725 年頃の作品

正しいメリアンをカヴァーに

今回の改訂新版で外見上の大きな変化は、本のカヴァー（book jacket）の変化です。初版のカヴァーを飾ったのはエミリ・デュ・シャトレで、その肖像の上に透明な板ガラスが置かれ、それに無残なひび割れが入ったものでした[1]。女性たちの努力の報われなさをイメージした傑作でした（図 2）。しかし、図はやや不鮮明でやはり 30 年間のギャップを感じさせるものでした。

新しいカヴァーのデザインを考案する過程で、工作舎のデザイナーと編集長で高画質の画像データをネットで探索する中、思わぬ大発見がありました。それは原著 69 頁に掲げられたマリア・シビラ・メリアン（1647-1717）の肖像画（エッチング）が、実は彼女自身ではなく彼女の顧客の一人を描いた肖像のようだということでした。その後、証拠となるエッチングもネット上に公開されていることが判明しました。メリアンは『スリナム産昆虫変態図譜』で知られ、博物学的探究にも熱心な女性画家で、先の肖像画には多くの蝶の標本や貝殻が描き添えられており、まさにメリアンらしい道具立てでありました（図 3）。新たに見つかった肖像画の下にはラテン語の説明がありますが、シービンガーの著作の挿絵図版は文字情報のないものでした。

ネット上に公開されていた肖像画の下に記載されたラテン語は、描かれた人物がエステル・バルバラ・フォン・ザンドラルト Esther Barbara von Sandrart（1651-1733）であることを告げていました。彼女は有名な画家にして著述家のヨアヒム・フォン・ザンドラルト Joachim von Sandrart の妻で、メリアンの顧客だったのです。さらにネット上の情報によると[2]、エッチングの下のラテン語説明部分を切り取って、メリアン像として売った人物

がいるようなのです。メリアンとエステルはわずか 4 歳違いですから、それもあり得る話です。シービンガー氏も最初は信じられない様子でしたが、証拠となる資料から最終的には納得せざるを得ないと考えたようでした。メリアン本人の肖像画に置き換えるということで選んだものが最晩年のメリアンでした（図 1）。カヴァーを飾る女性としてこの発見に勝る画像はありません。

30 年の経過でまさしくカヴァーを飾る女性も若々しい貴族女性シャトレ夫人から年老いた 70 歳のメリアンに替わったというわけです。十川さんからご提案頂いたとき、高齢社会の女性研究者に相応しく、それもいいなと私には思えました。改訂新版をお贈りさせていただいた女性研究者のお一人は、「封を切って表紙を目にしたとき、一瞬驚きました。…こういう表紙絵は若い女性像という、思い込みを持つ自分にも気づいた次第です。…還暦を過ぎた身として何やら元気づけられた気持ちになりました。過去の女性研究者たちも、こうやってずっと研究を続けてきたのですね。」と書き送って下さいました。メリアンは老女そのものではなく、まだ生き生きと好奇心に燃えている雰囲気で、高齢社会の素敵なロールモデルと言えそうです。

二人の共訳者との別れ

メリアンを女性研究者のロールモデルと書きながら胸が痛むのは、本書の 2 人の共訳者が若くして亡くなられたことです。それこそがこの 30 年間での一番大きなギャップです。すでに中島（旧姓　家田）貴子さんは 2018 年に闘病もむなしく逝去されていました。もう一人の訳者である藤岡さんに改訳の意向を伝えたのが 2021 年の夏でしたが、すでにその頃から体調不良を訴えておられました。仲間内では、定年になった翌年は長年の疲れがどっと出て来るよねといった話もあって、ご無理でない範囲でご協力をお願いしました。しかし年明け早々に受診された結果、余命がそれほど長くないことが判明したのでした。伸子さんは積極的な治療は断り静かに生を全うすることを選ばれました。

貴子さんの場合にも、「神様が私を必要とされるなら、いつでも私はあなたの下に参ります」と少しの迷いもなくご自分の死を受け入れておられたと牧師さんから伺って、そうした信仰を持たぬ私は、どうしてそこまで素直になれるのだろうと、ご葬儀のときに考えていました。彼女は本当に優しく素直という言葉通りの人でした[3]。クリスチャンではありませんが、伸子さんも静かにご自分の運命を受け入れ 2022 年 8 月にお亡くなりになりました。受診から 8 か月という余りに早い死の訪れでした。彼女たちの毅然とした死に対する向き合い方は、私には到底考えられません。自分はきっと執着し、往生際の悪い人間に違いありません。

おわりに

既に長々と裏話を書き連ねてきましたが、実はこの本にはもう一つ別の裏話があります。それは原著 *The Mind Has No Sex?* を『科学史から消された女性たち』という本に仕立て上げてくださった工作舎のこのタイトルを、そのままそっくりタイトルとして流用したのみならず、川島慶子さんが当時お書きになったものや、小川の拙著、その他から盗用した文章をそのまま沢山散りばめて作られた新書版が世に出るという騒動が起きたことです。詳しくは工作舎のホームページに川島さんが書き残して下さっていますので、そちらをご覧いただければと思います[4]。最終的な

和解段階で、十川さんとご一緒に某出版社に出向いたことを思い出します。こんなに誤訳があることが分かっていたら、私たちもっと低姿勢だったかもしれないなと思ったり、本のタイトルを流用した人は何も気づいていないかったのだろうかとか思ったりしました。そして、今回の改訂作業を行う際のメール交換の中で、十川さんは「私たち若くて、怖いもの知らずでしたね。あの頃が懐かしいですね。」と。本当に若くて怖いもの知らずであったに違いありません。しかし、3人で笑い合うことが一杯の日々だったことを、懐かしく思うばかりです。2人の共訳者のご冥福を祈りつつ、筆を擱くことに致します。

---

[1] 十川さんからの情報によりますと、初版の表紙写真は、当時のデザイナーとカメラマンが何枚ものガラスを割って、ひびの入り具合の良いものを選んでカメラに収めたとのことです。今日では、ガラス板ということで、ガラスの天井を打ち破るといったイメージを持つ若い人がいるらしいのですが、18世紀の彼女たちにはそこまでの勇ましさは望むべくもなかったことでしょう。「ガラスの天井」が広く一般に知られるようになったのは、ヒラリー・クリントンが大統領選で敗退してからのことでしょう。

[2] https://merianin.de/en/home/fiktive-portraits/ https://enfilade18thc.com/2018/12/06/looking-for-the-1725-portrait-of-esther-barbara-von-sandrart/

[3] 翻訳本の方には詳しく書かなかったのですが、本誌が科哲の同窓会誌なので貴子さんが亡くなられて3年目に行われた「中島貴子さんを偲ぶ会」について少し記しておきたく思います。貴子さんを偲ぶ集いは、コロナ流行の中、お亡くなりになって3年目となる2021年11月23日に神田の学士会館で行われました。65名ものゆかりの人々が集い、貴子さんのいつも明るく前向きな姿勢を懐かしみました。中でもヒ素ミルク事件関係者の方が壇上に上がられ、貴子さんがほほ笑む遺影の前で泣き崩れられたご様子は、彼女がそうした関係の人々にとってどれほどか大きな希望であり慰めであったかを思い知ることになりました。本当にかけがえのない命が失われたのだという思いを、一層深くしました。最愛の伴侶の死から、中島氏がようやく立ち直りつつ歩み始められたこと、そしてお二人のお子様の健やかなご成長を嬉しく思っています。貴子さんの遺著もここに記させていただきます。中島貴子著・中島秀人解説『科学技術のリスク評価—森永ヒ素粉乳中毒事件を中心に』（編集工房　球、2021）。優しく素直というだけでなく、正義感に溢れる著者の一面をお分かりいただける本です。享年56歳は余りに若く残念でなりません。

[4] https://www.kousakusha.co.jp/ISSUE/kesareta.html

■ おがわ　まりこ
基礎科学科卒。1974年「科哲」修士修了。現在、東海ジェンダー研究所理事。
著書に『フェミニズムと科学 / 技術』、『甦るダーウィン』、『病原菌と国家』、訳書にシービンガーの科学とジェンダー関係の著作など。